17の講義内容　文字遊び（回文・逆さことば・しりとり等）

2007.10.19 ～ 2010/10/07 更新

## 五七五のリズム川柳に見る回文

「回文の屋号八百屋に焼接屋」と云う、上から読んでも下から読んでも同じ文章ことば、これを「回文」と呼称する。江戸の「八百屋」に「焼接屋」と三字から五字程度のことばとはいえ、「小箱」「逆さ」「寿司酢」「新聞紙」「田植え歌」「ＳＢＳ」などと良く探せば身の回りにあるわあるわ回文ことばなのである。地名や人名においても「田端」「龍田」「杵築」「小池啓子」「小俣玉雄」と続く。これが句となれば「西か東に」「夏まで待つな」「留守に何する」「慥かに貸した」「如何にも苦い」「意外に意外」「恋なんかわかんない娘」「私負けましたわ」「内閣退くかいな」「夏まで待つな」「慥かに貸した」「ダンスは済んだ」「磨かない鏡」「」となっていく。時には破格まがいのことばも登場する。上から読んでも「山本山」式に、「赤坂」をローマ字にして「ＡＫＡＳＡＫＡ」.となっていくから面白い。よく使う説明に、「ＲＯＭＡ」を逆に読むと「ＡＭＯＲ」となったりする。これを「倒言」という。これが次に冒頭でも触れた五七五の「俳句」「川柳」や更に五七五七七の和歌や短歌・狂歌ともなると、回文にも味がでてくるというものだ。これを見事に上から読んでも下から読んでも同じという決まり事を頑なに守り実行すると、ちょっときついものがある。そこで、清濁共通で良い、仮名遣いは許容とすることで自由闊達な回文が登場してくるのである。



江戸時代の松江重頼著『毛吹草』〔寛永十五年（一六三八）〕は、正に江戸回文の魁資料ともいえる作品群である。また、その後を追うかのように『世話字尽』〔明暦二年（一六五六）〕が出回っていることからその盛況ぶりが伺えるのである。

咲くかずは十とやとをと廿日草　『ゆめみ草』巻五

ここには「咲くかずは」と「はつかぐさ」に見るように、「かず【数】」と「かつ」で清濁も仮名遣いも破格にして表現している。

『毛吹草』の回文発句（春夏秋冬）を幾つか示しておこう。

目をとめよ梅かながめん夜目遠目　重貞
ながむへき庭はや母に木へんかな　重方
花乃鈴なりけりけりな鈴の縄　春可
永日に舞蝶とぶ蝶二疋かな　作者不知
友乃來つ子規猶なきし月の下　宗房
葉乃筋ハしら糸いらじ蓮の葉　重頼
峯に野乃萩かや垣ハ野の錦　作者不知
咲みたか互にみたか形見草　梅盛
乳も呑かよろこふ子ろよかんの餅　作者不知
ひえにけさのむかやかんの酒に酔　重方

室町時代の古辞書『運歩色葉集』〔元亀二年本久部195頁〕に収録された回文歌二種を見ておこう。

むらくさに　草の名は　もしそなはらば　なぞしも花の　咲くに咲くらむ
長き夜の　とをの眠りの　みな目醒め　波乗り舟の　音よきかな

この二首の回文歌は、実に巧妙なものとなっている。後の歌は、正月の初夢を見る際に枕の下に七福神の図会と一緒にこの歌を添えておくと好運が廻ってくるとされた、歌意は、「とをの眠り」が「遠の眠り」と「疾うの眠り」にも取れて懸け詞になっているように思えてならない。

そして、もう一つ「キシノカタモヽタカノシキ」という文句を添えている。

連歌にも、

眺めしは野菊の茎の初めかな／咲く花は咲く草花は草／知らぬげに案山子に鹿が逃げぬらし／弓張り取らむ群鳥は見ゆ／恪気言ひ腹立てたらば贔屓無理／聞くにぞ憎き聞くにぞ憎き／詠みは置く歌道の歌か句をば見よ／歴々の詩も文字の裂々／しつくりと御家の塀を取り崩し／大工繕ひ広く造いた

と云ったグループ趣向の回文創作が試みられている。

## 回文を私たちも創ろう

回文の「キィーワード」表は、「倒言」を知ることで、生まれてくる。

くるま【車】は「まるく【円】」
くすり【薬】に「リスク」



ゆき【雪】はきゆ【消】
うめぼし【梅干】の「萎め雨」
くろい【黒い】と「いろく【色苦】」
うつくしい【美】が「イシクツウ【意志苦痛】」
かたな【刀】は「なた【鉈】か」
いいおんな【好い女】…なんをいい【難を云い】
いいおとこ【好い男】…ことをいい【異を云い】

などと普段から、鉛筆とメモ紙を用意して、この手のことばを吟味しておくと、手っ取り早く即座に回文を書き出すことができるようになるというものだ。この組み合わせを次第に長くしていくことを心がければいいのだ。昔、東大教養部のトイレの落書きに、「ヘアリキッド　ケツにつけ　どッきり　アヘ」と云う回文が書かれていたという。実に巧い回文であった。平成の時代を諷刺した回文を是非創ってご披露願いたいものである。

## 逆さことば

「みしのたくかにと」〔こぐま社、一九九八年刊〕という絵本をご存知であろうか。逆さことばを理解しない人には見えてこない世界である。「とにかくたのしみ」この本の添え書きに「みしのたくかにと・・・・・なんて、なんて奇妙

なタイトル？　横書きを右からよんだ教科書を知っているお年よりとカンの働く子どもならすぐわかるでしょう。さあもうわかりましたか。…」と記載している。「逆さことば」は、「回文」とは異なって、下位から読むときしか意味をなさいという代物である。ひっくり返して意味が分かっている内輪だけのことば表現が広く一般に知れ渡った例として、関西ことばに「ゲンをかつぐ」がある。この「ゲン」だが、「ギエン【起縁】」が二重母音調和によって「ゲン」と成ったことばであるから、元は「エンギ【縁起】」という字音語をひっくり返した表現が原義である。

## 尻取り合戦

お金はないが、時間はある。このとき最低二人の人がいればできる「ことば遊び」が「尻取り」である。ルールはことばの末尾に「ん」がくると負け、ことばの豊富さが勝ち負けを決める。日本語の弱点であった、ラ行音のことばが多くなるとつらいものがるが、昨今はカタカナ用語が日本語に多く取り込まれ、このあたりを補填してくれているので意外と手強いことば群となったのが事実である。

《ラ行ことばカタカナ語》

［ラ行］ラクダ・ラッパ・ランドセル・ラジオ・ラジカル・ラスク・ラッシュアワー・ライスカレー・ライセンス・ライター・ライダー・ライト・ライブ・ライフセーバー・…

［リ行］リラックス・リフレッシュ・リトル・リミット・リアリティ・リーズナブル・リーダー・リーチ・リカバリー・リクエスト・リクルート・リサイクル・…

［ル行］ルール・ルーム・ルーラー・ルアー・ルーキー・ルーツ・ルート・ルーペ・ルーレット・ルックス・ルネッサンス・ルワンダ・ルンバ・…

［レ行］レール・レンタル・レアチーズケーキ・レイアウト・レコード・レインコート・レインボー・レース・…

［ロ行］ロッカー・ロック・ロイヤル・ロイター・ローズ・ローヤルゼリー・ロマネスク・ローカル・ロマンスカー・ローストローズマリー・ロード・ロードショー…

茲にざっと、頭に浮かびあがってきた片仮名ことばを記しておいたので、参考とされたい。



## 洒落だか駄洒落だか

これは「あのねのね」〔一九七三（昭和四八）年ＴＶ番組で活躍〕という歌手兼ギャグ・コンビのネタである。

「サカナ屋のオッサンがァ、死にはった。ギョッ」

「サカナ屋のオッサンがァ、屁こいた。ブリ」

日本人の食文化は魚類と縁が深いというか、食卓に魚が乗ることが多く、ついつい「魚名づくし」式に「洒落」てみるのである。「おとなしい坊（ぼう）に土産を買ってきて……ほ（欲）しいいか【干し烏賊】」と云うようにだ。時には相手が気に入らないとまぜっかえすことば表現にもなんと、「魚ノ名」が口をついて出るという塩梅である。たとえば、「ありがてぇなぁ」とお礼の一言が出ようものなら、「蟻が鯛だとぉ、蟻が鯛なら芋虫や鯨、蜈蚣（むかで）汽車なら蝿が鳥」という具合に受け答えしてしまう。女性に「ええ！」と返事されたら、すかさず「ええ【鱈】よりたこ【蛸】が旨い」とやり返すのも同じ。

人名の駄洒落もある。或時、同じ会社の社員として「堺」「酒井」「坂井」と同じ呼び名の三人の

「サカイ」さんがいて、電話の受け継ぎに事穏やかならずの課長さんが「サカイが三人でミサカイがつかんわい」としゃれて抗弁したことがあったそうな。作家名もやけくそ気味に「クタバッテシマェ」と自嘲して付けたというのが明治の作家二葉亭四迷である。

## 謎かけ

幼稚園くらいの子から小学校低学年の児童に人気のある「謎たて」は、「かけてもかけても前に進まないもの、なぁに？」と云うのがある。実は答えは一つでないから面白い。普通身近なものを記憶して答えるから、答えは「いす【椅子】」。その他「洋服かけ」「ふりかけ」「電話」「メガネ」「レコード」「かけ算」「ルームランナー」と身近にある物の答えが飛び交うのである。これが一段、二段と上達すると、次のような「何とかけて何と解く、その心は何々」式の「謎立て」が作られるのである。

1，「独身寮」とかけて「火葬場」と解く。その心は、「シタイ、シタイ」でいっぱいだ。

2，「美脚」とかけて「万国博覧会」と解く。その心は、「パンツ穿く」の？は、林屋喜久蔵さんクラスかな。「あんたも好きにー」。

3，「コーヒー」とかけて　「実らなかった恋」と解く。その心は、「苦さの中に甘味も酸味もあります」。

4，「「ダ・ヴィンチ・コード」とかけて「小泉改革」と解く。その心は「分かりやすい映像」に潜む功と罪」―二〇〇六年五月三〇日　火曜日　寺山　正一 新産業夜話より―



5，「新聞の朝刊」とかけて、「和尚さん」と解く。その心は、「袈裟来て、経よむ」

6，「秋の紅葉」とかけて「歯磨き」と解く。その心は、「は｛葉＝歯｝がきれいになります」

7，「いろはの「イ」」とかけて、「船頭さんの手」と解く。その心は、「「ロ」｛櫓｝の上にある」

現代における「三段謎かけ」は、実にバラエティに富んでいる。

ところで、古典作品に吉田兼好『徒然草』にも名高い「なぞ話し」が書かれていることは、意外に知らない、気づかないであろうからここに紹介しておこう。第一三五段に、

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中将にあひて、「わぬしの問はれんほどのこと、何事なりとも答へ申さざらんや」と言はれければ、具氏、「いかゞ侍らん」と申されけるを、「さらば、あらがひ給へ」と言はれて、「はかばかしき事は、片端も学び知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそゞろごとの中に、おぼつかなき事をこそ問ひ奉らめ」と申されけり。「まして、こゝもとの浅き事は、何事なりとも明らめ申さん」と言はれければ、近習の人々、女房なども、「興あるあらがひなり。同じくは、御前にて争はるべし。負けたらん人は、供御をまうけらるべし」と定めて、御前にて召し合はせられたりけるに、具氏、「幼くより聞き習ひ侍れど、その心知らぬこと侍り。『むまのきつりやう、きつにのをか、なかくぼれいり、くれんどう』と申す事は、如何なる心にか侍らん。承らん」と申されけるに、大納言入道、はたと詰りて、「これはそゞろごとなれば、言ふにも足らず」と言はれけるを、「本より深き道は知り侍らず。そゞろごとを尋ね奉らんと定め申しつ」と申されければ、大納言入道、負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

とあって、源具氏（建治元年没・四四歳）が大納言藤原資季（正応二年没・八三歳）に「日頃不審に思っ

ていることをお尋ねして宜しゅうございますか」と念押しをして聞くことになった。これを殿中の人々が小耳に挟み、後日御前でご披露することになった。具氏は、「幼い頃から聞いていることなのですが、どうしても解けないのがこのことばです。どのような意味なのでしょうか」と云って、

**むまのきつりやう、きつにのをか、なかくぼれいり、くれんどう**

という文言を大納言資季に問うたのである。このとき、大納言資季はこの文言について全く分からず、「こんなくだらぬことは、論外だ」と言い逃れしようとしたが、「他愛もないことをお尋ねすると、前もってお約束しました」と詰め寄られ、大納言資季は高慢な姿勢を挫かれたという内容がこれである。だが、作者兼好は、この文言の謎解き解説を一切していない。このことは、すべて智恵ある人であれば承知する内容のことと云うのか、問いかけた具氏自身も知らないのであれば、その解釈のほどを知りたいと思うのは人としてごく当たり前のことではあるまいか。さて、兼好自身知っていたのか知らぬのかこの「なぞ」の文言を載せたことで、一躍知られるようになったからその注釈者は、考えさせられるハメとなったのである。実際、真名本『徒然草』では、

馬吃糧、狐丘凹、入九連等　〔服部南郭〕
馬吉駅、狐丘凹、入九連倒　〔塙保己一〕

としているが、この元のことばを漢字を以てこじつけてしまっていて、これでは始末が悪い。謎解きが難解になってしまうことは見たとおりであろう。実際、このなぞを解いたのは、京都に住居した俳人柏原瓦全（一七四四―一八二五）であった。賦物式のなぞを知る手がかりは、宮方にお仕えしたことのある老婦人が「椿落ちて露となる」を「雪」と解いた。「ツバキ」の「ハ」が落ちて「ツキ」、この「ツ」が「ユ」と成ると云う仕組みである。これを瓦全は、上記の文言に応用したのである。

謎解きをしてみよう。「馬退きつ」で冒頭を削除する。「りやうきつにのをか」を「中凹れ入り」



は、最初の「り」と最後の「か」だけを残し、其の中間七字「やうきつにのを」を陥没させてこれも削除する。「りか」の語を最後に「ぐれんどう」即ち「顛倒」させると、答えは「かり【雁】」と成るのである。だが、此の後、「馬退きつ了（りやう）」とし、「きつにのをか」の六字を「**なかくぼれいり**」と解釈した別解が表出する。これを「中窪」「れ入り」とし、「つにのを」の四字を削り、この間に「れ」を入れて「キレカ」、これを顛倒させると「かれき【枯木】」と成るといった安良岡康作『徒然草全注釈』の説がそれである。謎立ては、作り手が考案したとき、解答は一つしかなかったはずだが、よくよく考慮吟味してみるに、別解が考えられるから妙味なのである。

こうした「字謎」は、今日でも途方もないところでお目にかかるから不思議だ。これは電車つり広告にあったダイヤモンド社のもので、「外資系企業が欲しがる脳ミソ」と題した問題適応力をためす方法に、

「嘘つきの始まりは泥棒の始まり」と云いますが、「嘘つきの始まりは泥棒の終わりでもある」ものは何か？

というは、当に「字謎」そのものである。如何でしょうか？

また、最初の三段なぞについても、江戸時代の松平樂翁（一七五八―一八二九）の随筆『退閑雑記』に、

「かけがね」と懸けて「何と解く」
1，浪花の人「大船」と解く、その心は「港（皆戸）に着く」。
2，京の人　「女」と解く、その心は「殿さん（戸の桟）に着く」。
3，江戸の人「茶碗酒」と解く、その心は「引っかけて寝る」

といったように、三都それぞれの解が人情を反映しているが、これを現代の長寿テレビ番組「笑点」

に見ると、まさにこれを地で行く感がある。

こうした、洒落を応用する心構えがあれば、人を動かす歌や文章にも自ずと磨きがかかってこよう。

和歌の三段なぞを見てみると、

我が戀は　細谷川の丸木橋　ふみ返されて　ぬるる袖かな

「私の恋」とかけて、「細谷川の丸木橋」と解く、その心は「ふみ（「文」と「踏み」）返されて袖をぬらす」。

と云った具合にことばを掛け合うことで表出するからだ。「ことわざ」にもその真髄がある。例えば、

親の意見と冷酒はあとできく

「冷酒」とかけて「親の意見」と解く、その心は「あとできく」。

こうしたしゃれた表現の「ことば遊び」そのものに、書くことの奥の院を学ぶところは、私自身「大」とみたのである。世界中のことば文化を以てすれば、こうした「謎立て」はもっと視野が広くなるであろう。最後に、中国後巍第七世宣武帝の御代咸陽王と従者竜虎の「舊謎立て」を見ておこう。

眠レバ則チ倶ニ眠リ、起レバ則チ倶ニ起ル、貧ルコトヨリ如クニ豺狼ノ一、賦スルモ不レ入レ己ニ、都ベテ不レ有ラレ小ナルコトニ規刺ヨリ一也

その答えは、「眼」と咸陽王は前半部に目を走らせただけ、実際の解答は、「箸」である。「箸」は人が眠るときには眠り、起きれば起きる。食物を食べることはまさに豺狼に等しいが、己のために掻き込む物ではない。大きさもとげより小さいことはない。こどもの「謎かけ」に「いる時にいらなくて、入らない時にいる物なぁーに」に類似していよう。こうした「謎立て」も文章をときめかすに大きな働きをしてくれるから実に不思議でもある。どうぞ、智恵の遊び存分に嗜んでみませんか？



## 語呂合せ

「窮巨、トラをかむ」は、一九八八（昭和六三）年八月十六日付け朝日新聞の見出し、諺の「窮鼠猫を噛む」のもじり、すなわち「語呂合せ」。ラジオから流れてくるコマーシャルを聞いていると「いちょみてみょうかどう」なんてへんちくりんなことば表現が使われたりする。「言って見よう！イトーヨーカドー」をもじって宣伝文句としている。このほか「○が□を××す」式で「カラスが声を涸らす」「薔薇が秘密をばらす」「鳩が身をはっとす」

数字の語呂合せはお手の物、「八月三十一日は野菜の日」って云うのも「８３１（ヤサイ）」から来ている。探せばまだまだ見つかるのがこの語呂合せである。

［コラム１］日本人の知らない日本語「絵にすると怖い漢字」

「伏」の文字は、人の傍らに犬が寄り添う「象形文字」、でも王様の墓に人と犬を並べて埋葬したからという説もあり、漢字は絵にすると怖いことが見えてくるものです。他には「百人一首』は、人が百人いて首がたったひとつ!!。